取材協力：生國魂神社

生國魂神社では、毎年9月の第1土曜・日曜に、上方落語の始祖の一人・米澤彦八にちなんだ「彦八まつり」を、上方落語協会主催で実施。落語家たちと直接ふれ合える機会とあって年々盛況になっている

境内には落語家の屋台がずらりと並ぶ

林家一門勢揃いで住吉踊りを披露

～上方古典芸能と文化を巡る～

落語・時間を訪ねる旅

第二回

「曽根崎心中（そねざきしんじゅう）」（文楽）

文楽って、ごらんになったことありますか？日本の伝統芸能、人形浄瑠璃です。江戸時代には庶民の娯楽として隆盛をきわめました。映画もテレビもなかった時代、「きのう、キムタクのドラマ見た？」と話題になるのと同じような感覚で、文楽の演（だ）し物が庶民に愛されました。今では重要無形文化財になっていたり、ユネスコの世界無形遺産にも登録されたりして、何やら高尚な芸術ととらえられがちですが、本来はもっと身近なもの。今も昔も、文楽は日本が世界に誇れるエンターテインメントです。今回は文楽「曽根崎心中」と上方落語との歴史的な〝交差点〟を訪ね、文楽の魅力を探ってみようと思います。

ナビゲーター
落語家
林家竹丸

生國魂（いくたま）神社

大阪市天王寺区の由緒ある神社。地元の人は「いくたまさん」と呼んで親しんでいる。歴史は古く、社伝では、神武東征の時、難波津に上陸した神武天皇が、国土の神である生島神・足島神を現在の大阪城付近に祀ったのが始まり。豊臣秀吉の大坂城築城の際に現在地に社殿を造営し、天正13年（1585）に遷座した

元禄の頃、生國魂神社の社頭で辻咄（つじばなし）の興行をして大変人気のあったのが米澤彦八で、その得意芸は、「しかた物まね」。『鳥羽絵三国志』（享保年間〈1730頃〉）の絵に「生玉よねざは彦八、かほ見せかほ見せ、ひゃうばんの大名大名」とあり、大名の滑稽な真似もしたらしい（石碑に彫られた彦八の像は、同書の挿絵からとったもの）

生玉人形は、昭和初期まで神社の参道で売られていた操り人形の玩具。写真右端の人形は、烏帽子をかぶった彦八がモデルだとも言われる

平成2年、米澤彦八に縁が深い生國魂神社境内に「彦八の碑」が建てられた

浄瑠璃の床本を手に得意の一節をうなる

林家 竹丸（はやしや・たけまる）落語家。本名は前田仁。1965年宝塚市生まれ。95年に四代目林家染丸のもとへ入門。天満天神繁昌亭などを拠点に、落語会に多数出演。講演、コラム執筆など幅広く活躍している。入門までの約6年間、NHK記者として徳島・大阪でニュース取材を担当した異色の経歴を持つ。2006年に第43回なにわ芸術祭（産経新聞社主催）新人奨励賞を受賞。

文楽で最もよく知られた演目の一つ、近松門左衛門作「曽根崎心中」。この話に、落語との交差点を見つけました。

文楽「曽根崎心中」の冒頭は、お初が徳兵衛と再会する「生玉社前の段」。お初が案内してきた客が「物真似聞きに」行きますが、それを演じていたとされるのが上方落語の始祖・米澤彦八。元禄から正徳頃（一六八八～一七一五）、生國魂神社社頭で役者の物真似芸や軽口噺を披露して人気を博したそうで、近松門左衛門も、そうした当時の風俗を作品に取り入れています。

その「交差点」の生國魂神社を大阪の上町台地に訪ねました。

前々から少し疑問に思っていたことがあります。彦八は、屋外でどんなふうに演じたのか。以下、生國魂神社の權禰宜の中村文隆さんの明快な解説。

「今のような高座と違って、その場の人の数や年齢・性別に合わせて自分の芸を披露したようですね。もう一人の上方落語の始祖と言われている京都北野天満宮で活躍した露の五郎兵衛にしても同じ。上方落語は、そうした自由に芸を変える」という伝統を受け継いでいて、だから上方の落語家さんは、その場に応じた対応が自然にできるようにも思いますね」

うーん、そうか。そのへんのしぶとさは、現代の落語家に継承されてきてるのかもしれません。

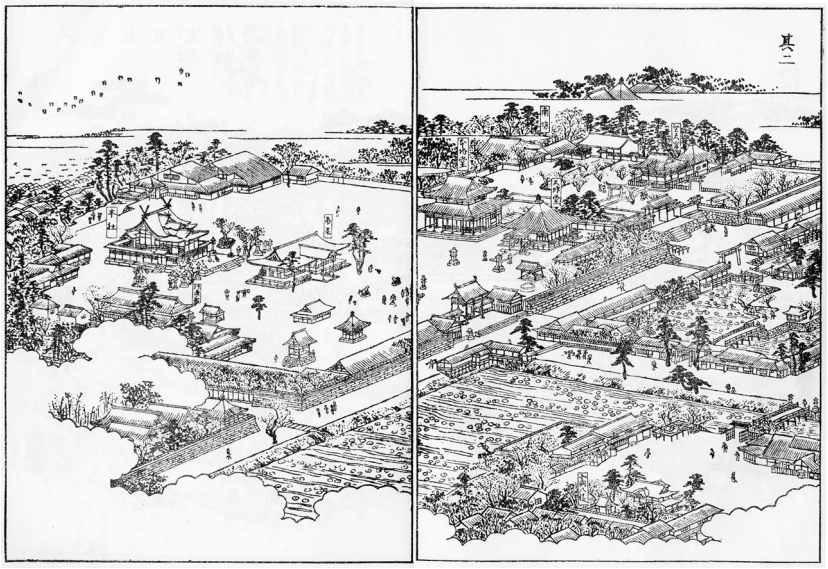
生玉社（生國魂神社）前で久しぶりに遊女お初と恋仲の醤油屋手代・徳兵衛が出会う場面から悲恋の物語が始まる（写真は「曽根崎心中」生玉社前の段、提供：国立文楽劇場、協力：㈱人形浄瑠璃文楽座）

曽根崎心中と近松門左衛門

元禄16年（1703）4月7日、堂島新地天満屋の遊女・お初と、内本町平野屋の手代・徳兵衛が、天神の森で情死する事件が起こった。一か月後、これを人形浄瑠璃「曽根崎心中」として劇化し大評判をとったのが近松門左衛門。物語は、徳兵衛とお初が生玉の社で久しぶりに再会する場面から始まる。徳兵衛とお初は恋し合う仲。だが、誠実に働く徳兵衛に、店主の姪との結婚話が出て、知らないうちに徳兵衛の継母に結納金まで渡されていた。徳兵衛は、その金を継母から取り返すが、どうしても金がいるという友人・九平次に三日限りの約束で貸してしまう。だが九平次は「借金など知らぬ」と、徳兵衛を公衆の面前で罵倒し散々に殴りつける。信頼もお金も失ったお初と徳兵衛は、真夜中に手を取り合い、天神の森へ行き命を絶つ。

生國魂神社境内に11ある境内社の1つが「浄瑠璃神社」。近松門左衛門や竹本義太夫といった文楽の成立に尽力した「浄瑠璃七功神」らが祀られ、文楽や芸能の関係者の信仰を集めている。「私も芸の上達を祈らせてもらいました」（竹丸）

生國魂神社境内を權禰宜（ごんねぎ）の中村文隆さんにご案内いただいた。浄瑠璃神社の前には、技芸上達を願うたくさんの絵馬がかかる



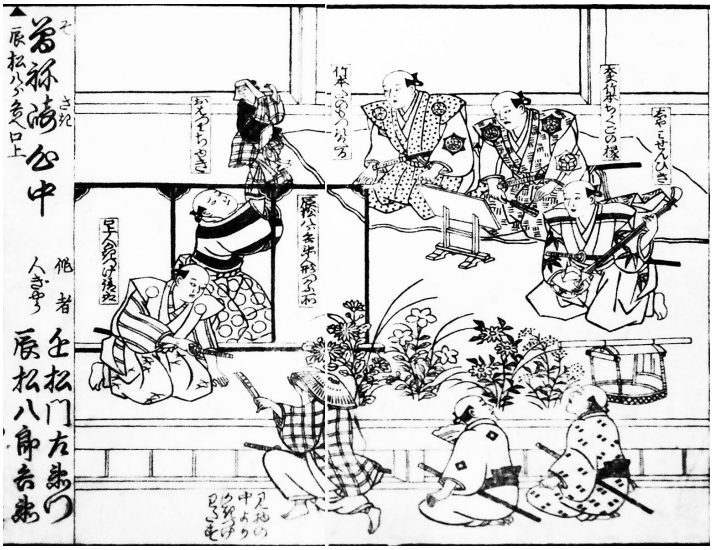
「摂津名所図会」（寛政8～10年〈1796-98〉）に描かれた生國魂神社
門前には赤い花と白い花に分かれた蓮池があり、彦八はこの付近のよしず掛けの小屋で芸を披露していた。徳兵衛が九平次らに打擲されたのもこの蓮池のほとり

神社の北門を出て坂を下り、向かったのは国立文楽劇場。実は私、文楽ファン。これまで何べんも足を運んでいます。

舞台でまず目が行くのは、やっぱり人形です。三人の人形遣いによって魂が入ったかのように動くさまに興味を持ちます。しかし、何度か見ていると、舞台の上手で三味線の伴奏とともにストーリーを語る大夫（たゆう）さんにもひかれるようになりました。「でぇーん」という太棹（ふとざお）の三味線の音にのって朗々と響き渡る、あの鍛えられた声。声そのものに表情があるんです。実際に劇場に足を運ばないとわからない魅力です。

私、大夫さんが語る浄瑠璃（義太夫）を、女流の竹本綾春師匠に教わっています。発声を鍛えるのと、噺の中で浄

「曽根崎心中」天満屋の段。お初の足をのどに当て、死ぬ覚悟を伝える徳兵衛。この物語が流行し、心中ブームが起こったことから、幕府は1723年に上演を禁止した。お初の人形の足を見せる演出は、戦後に復活された際に案出されたもの（写真は、平成19年11月国立文楽劇場公演　お初・桐竹勘十郎、徳兵衛・吉田玉女、提供：国立文楽劇場、協力：（特活）人形浄瑠璃文楽座）



「曽根崎心中」観音めぐり舞台図（「牟芸古雅志」〈むぎこがし〉、文政9年〈1826〉）
現在の三人遣いと異なり、当時は人形も小さく、下から手をさし入れる一人遣い

国立文楽劇場

取材協力：国立文楽劇場　資料図版は国立文楽劇場蔵

国立文楽劇 場1階には、文楽に関する貴重な資料を公開する展示室が設けられており、だれでも無料で見学できる。「特別に一人遣いの 文楽人形を触らせてもらいました」（竹丸）

国立文楽劇 場は1984年に開館。大小2つの劇場と展示室などをあわせもつ。「落語の独演 会が開かれたり、私も出演したことのある上方演芸特選 会が隔月催されたり、われわれとも縁が深い劇場です」（竹丸）

現在、人形浄瑠璃＝文楽とされるのは、明治時代に三代目植村文楽 軒が開いた「文楽座」が大いに流行したことによる。初代の植村文楽 軒は、寛政年間（1789–1801）に、一度衰 退していた人形浄瑠璃を再興させた人。現在の国立文楽劇場の近く、高津橋に劇場を持っていたのも因縁深い

■国立文楽劇場公演案内
国立文楽劇場では、11月1日～24日に次回の本公演が行われます。興味を持たれた方は、是非、ご覧ください。
［演目］鞍猿、恋娘昔八丈、五世豊松清十郎襲名披露口上、本朝廿四孝、双蝶々曲輪日記、八陣守護城

瑠璃をうなる「豊竹屋」などの落語に生かそうと始めました。

続けているうち、そんなマジメな動機はどうでもよくなり、自分で語って浄瑠璃の雰囲気にひたるのが好きになりました。教わって感じるのは、床本（ゆかほん）（台本）の一字一句、一音たりともおろそかにしない厳格さ。台本がなく口伝で残ってきた落語と大きな違いがあります。音楽でいうと、義太夫はクラシック、落語はジャズですな。

興味の持ち方は何でもいいではありませんか。それこそ、「あの大夫さん、イケメン！」でもいい。自分で勝手に敷居を高くせず、とにかく劇場に行ってみましょうよ。必ず、新しい発見がありますから。（談）

落語・時間を訪ねる旅

～上方古典芸能と文化を巡る～

第二回

道頓堀にひっそり佇む竹本座跡。「今から300年ほど前、このあたりに近松や西鶴らがいたと思うと感慨深いものがありますね」（竹丸）

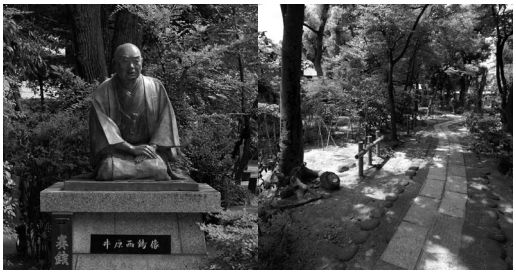
この世の名残り、夜も名残り、死ににゆく身をたとふれば あだしが原の道の霜…

ビルに囲まれるようにしてある露天神社（お初天神）。元禄期のここでの心中事件が、近松門左衛門に世話物の傑作を書かせることになった

松屋町筋と千日前通の交差点北西角に建つ近松門左衛門文学碑。「心中重井筒」の一節が彫られている。国立文楽劇場の完成を記念して、谷崎潤一郎の文学碑と併せて建てられた

近松門左衛門（「難波土産」元文3年〈1738〉）

生國魂神社から谷町筋を北に徒歩十数分、細い路地の奥に近松門左衛門の墓所がある。当初はこの近くの法妙寺境内にあったが、同寺が市外へ移転し、墓だけ現在地に残された。なお、近松の墓は兵庫県尼崎市の広済寺にもある



生國魂神社は、近松と重なる時代を生きた井原西鶴が延宝8年（1680）に一昼夜かけて四千句を独吟するなど、「矢数俳諧」の興業を行った場所。西鶴の像も境内にある

毎月8日、生國魂神社の前で催される骨董市。「彦八を偲んで、市をのぞかせてもらいました。こんなふうに集まってくる人たちに、彦八は芸を披露してはったんでしょうか」（竹丸）。13時からはセリも行われ、それを目当てとする人がたくさん訪れる

「落語と浄瑠璃の深い関係」……竹丸

昔、浄瑠璃は庶民の間でたいそう人気を集めていたそうです。町内に稽古屋（当世のカルチャー教室）があり、旦那衆が浄瑠璃を習いにいった。その素人芸を店の者や近所の人に披露するわけです。有名な浄瑠璃の筋やせりふは、町の誰もが常識として知っていました。そんな土壌から、浄瑠璃を題材にした落語がぎょうさん生まれました。「寝床」「軒付け」「豊竹屋」などなど。ほかに「胴乱の幸助」は「桂川連理柵」の、「猫の忠信」は「義経千本桜」のパロディです。落語は、そのときの世相や流行ものをどんどん取り入れる、雑食動物（笑）みたいな芸ですな。

国立文楽劇場西方の街路沿いにある谷崎潤一郎の文学碑。人形浄瑠璃の話が物語の要になっている「蓼喰ふ虫」の一文が刻まれている